

10月12日からの10日間の中国紀行について

今回の中国出張の様子をレポートします。私の場合は、北京と南京は何もなく平穩無事でしたが、張家界では注意が必要でした。ですが、北京と南京の場合は、恐らく私が中国の研究者と一緒に行動していたこと、あるいは私が一人で歩いていて日本語を使わなかったから、かもしれません。ですから、日本人の皆さんがこれらの都市に行かれるとしても、中国人の友人がいない、あるいは日本人数名で行動するのでどうしても日本語を話してしまうといった場合には、以下の私の例は使えないかもしれません。また、私の中国出張は10日間で3都市しか回っていませんので、広い大きな中国の、ごくごくごく一部の話です。これらにご注意いただき、以下をお読みください。

私の出張は、ありがたいことに楽しく終わりました。が、実は日本に戻って最後に考えさせられるエピソードがありました。結局、日本人も中国人も、表では平穩・平安を装っていますが、心の奥底では複雑な気持ちがあるのだと思います。

しかし、重要なことは、お互いの交流を絶やしてはならない、ということではないでしょうか。現在の日中に必要なのは、文化、芸術、学術の交流の活性化です。我々一般人のレベルから、お互いをもっとよく知り理解し、お互いを認め合い、お互いが交流する価値・素晴らしさ・楽しさを共有することではないか、と考えています。このためには、お互いに相手国の人々に、要らぬ不快感を持ってもらわないことかと思えます。

日本人が中国の方に不必要な不快感を与えないためには、今現在の状況では、たとえ大都市であっても中国国内で日本語で大声で話をするのは、私はあまりお勧めしません。まあ、普通、どんな国の人でも、外国人が外国語でワーワー大声で話をしていたら、あまり良い気分はしないでしょう。そういった意味で、普通に礼儀正しくしておけば良いように思えます。

ただ、勘違いしてもらいたくないのは、この文章の最後にも述べましたが、中国で日本語を使うことを私がお勧めしない理由は、自分の身を守るためと言うよりは、むしろ中国の方々に不必要な不快感を持ってもらわないためです。中国は、(あまりに変なことをしない限り、またたまたま激しい人に出会わない限り)、安全な国です(つまり、日本と同じ)。これから中国に行かれる方で、私の経験を何らかの参考にされたい方は、どうぞ最後までお読みください。ちょっと、長いけど、、、。

10月12日：

ホテルに到着後、中国の人と午後2時ごろから昼飯を食べて、その後は彼らを研究所に帰しました。ちなみに、昼飯は以下の通り。シェフが、いわゆる北京ダックをさばいてくれました。



次の日に、彼らに一日中お世話になるので、あまり彼らを拘束しては可哀そうと思ったのと、彼らが「ああ、あなたが一人で歩くの？全然大丈夫ですよ。ただ、道に迷わないでくださいね。ホテルには戻ってね」と言われました。で、一人で北京の街を歩きました。表通りから裏通り、2時間ほど歩きました。

私が歩いていた間、何もなかった。というか、日本人とか外国人と思われていなかったかもしれません。スーパーで買い物したときは、お金が分からず、お金を全部出して「取ってくれ！」と英語で言ったが、レジの女の子は黙ってお金取って、おつりくれました。その後、「ごめんなさいね」と、うっかり日本語で言ってしまったが、相手はきょとんとしていました。

今日は、受入の先生が急用なので、夜の食事は無し（昼が2時から始まったので、食べたのが2時半から3時半と遅く、とても腹が減らない）で、そこでテイクアウトの弁当屋に行って、軽いものを買いました。このとき、完全に言葉が分からず、結局私が中に入って指さして「これくれ！」と言って、その後もテイクアウト（中国では、带走（ダイゾウ）と言う）なのか店で食べるのが店員が分からず混乱していた際も、私の身振り手振りを理解しようとして、最後は再びお金を出して「はい、取って！」で、おつりまで来ました。向こうは、多分、日本人とわかっていたと思います。が、大変親切に対応してくれました。奥の女の子は、やたら笑っていたのが印象的でした。以下、私とその夜に食べた「带走」です。美味しかった！



で、ホテルに帰って、夕方6時のニュースを見ていたら、驚いたことに中国のニュースで、日本の東京での街頭インタビューが流れ、日本の中年のおじさんたちのインタビューが日本語で流れました。なので、聞き取れました。彼ら（4名でした。30代後半から70代前半）の発言をここで詳しく書くと、この文書が政治的になってしまうので、それは避けます。ですが、彼らの発言を要約すると、「一部の日本人の発言が、今回の島を巡る問題のきっかけになったのではないか。今回の件は、日中お互いにとって良くない。しばらく民間交流を続け、時間をかければ、日中はもう一度仲良くなれる」と、いずれも日本人が中国のことを悪く思っていないコメントばかり流していました。中国語では、翻訳テロップでした。このニュースが、あまりにうれしかった。正直、ほっとしました。今回の厳しい状況で、10日間に渡って3都市を回る出張を、ほとんど一人で行うので、正直不安でした。が、この報道が中国のマスコミによって流されたということは、中国の人も日本との関係修復に動いてくれようとしているのではないかと、私に安堵感を与えてくれました。

10月13日：

朝から北京オリンピックの会場・公園を回ります。いわゆる「鳥の巣」を見て、10万人収容というその偉大な建造物に圧倒されます。そのほかにも、水泳会場のウォーター・キューブ等を見ましたが、中国がオリンピックのために広大な土地をほとんどゼロから開発し、オリンピック会場だけでなく、周辺の施設整備（公園等）から宿泊地、住宅地まですべてを開発したそうです。もう、壮大過ぎて、いくらお金がかかったか想像すらできません。まさに、「すごい！」の一言です。以下、一緒に行動してくれた女の子（ウー教授の秘書さん）です。ごめんなさい、ピンボケです。



ウー教授のラボに到着したら、もうすぐに講演してくれと。北京の研究所で講演しました。英語が不慣れな学生が多らしく、私が少し話して、アメリカ帰りの女性研究員が通訳する形を取り、結局2時間半くらい時間がかかりました（あー、しんど）。しかし、彼らの質問は大変的確で、みなさん大変優秀であることがすぐに分かりました。

質問の中に、「日本ではヤマナカがノーベル賞を取った。中国でも、モーがノーベル賞を取った。日本では、モーの受賞について、どういう風に報道されているか？」と、私の発表とは関係のない質問もありました（もちろん、質問者は、「ご発表に関係ないのですが、質問してよいのでしょうか？」と、礼儀正しかった）。私は、「そりゃ、アジアから2人も選ばれたので、日本でも喜んでいいる。報道によれば、日本の書店では、彼の本が良く売れているそう。私も読んでみたいと思っている」と答えました。で、実際に、今、「白檀の刑」と言う本を読んでいます。本当は、莫言さんの代表作(?)である「赤い高粱」から読みたかったのですが、どの書店を回っても売り切れ状態！先日の東京出張で、時間があるときに、渋谷の紀伊国屋にも立ち寄ったのですが、やはり売り切れ！でも、「白檀の刑」も興味本です。でも、、、この本の言葉の表現は、私にとっては少々強烈です。これから読まれる方は、少し心してお読みくださった方が良いでしょう。

で、夕食は、近くの有名レストラン。当然周りは中国人だらけ。もう、ビールをイッキのみばかりさせられ、お腹がビールでパンパンでした。ウー教授は、「すごいね！」、「(この料理) 高いね！」と、知っている日本語を大きな声で連発して、私に話してくれるのですが、、、大丈夫かいな？でした。が、周りの中国人はだれも見向きもしない。むしろ、私が立ち上がってイッキ飲みさせられるのを見て、喜んでい(るように見え)ました。料理は、例えば豚の焼いたやつ。いやー、美味しかった！



10月14日：

朝早くでて、北京から長沙に移動。フライト中、出てきた食事にヨーグルトが付いていたのですが、これを空けた途端、気圧の関係か少量ですが吹き出しました。と、、、隣の中国人女性がそっとティッシュを2, 3枚出してくれました。私は、日本語の本を読み、パソコンでも日本語を入力していたのですが、彼女はそれを見ていたように思います。が、彼女は、私が日本人であっても、親切に何も言わずに助けてくれました。私が英語で、「ありがとう。一枚でいいよ」と言っても、黙ってもう一枚を差し出しました。目では、「1枚じゃ足りないでしょ」と読めました。私が、また英語で、「ひょっとして、私のヨーグルトがそちらにも飛んじやった？」と聞いたら、彼女は、また無言のまま、自分のフタの空いた

ヨーグルトを示しました。ああ、この娘も同じことしちゃったんだ、、、。親切な心遣いに、本当に感謝でした。

で、長沙に到着。腹が少し減ったのと、張家界についたら夜遅くて飯が食えないと考えたので、レストランで以下の豚の炒め物丼を食べました。いやー、辛かった！でも、美味かった！このときは、英語も通じず、中国人ウェイトレス数名が寄ってたかって私に対応してくれました。ああ、ありがたや。でも、私は日本語は使いませんでした。



困ったのは、長沙の空港から張家界に向かうフライトが遅れ、搭乗口が変わったのですが、このことは英語では一切連絡されず、中国語のアナウンスだけでした。運良く、周りの中国人の反応を見て、彼らと同じ行動をとって、別の搭乗口で英語の分かるスタッフに聞いて、初めて以上を知りました。ホッ、助かった。

ホテルに午後 10 時ごろ到着。部屋に移動中、今回の ISRLE シンポの責任者の一人（もちろん、中国人）と一緒にきて、部屋にも一緒に入りました。で、「シンイチ、話しがある。ちょっと座ってくれ」と、席を薦めました。私は、何かと彼の話に聞き入りました。彼は、まず、今回のシンポが行われる張家界という土地について、簡単に説明してくれました。その内容（私の理解が正しければ、ですが）は、ここ張家界は、かつて旧日本軍が第二次大戦のころに数々の蛮行を行った土地であり、反日感情が強い土地であるとのこと。加えて、昨今の日中問題が起こり、日本人に対する反発が相当強いとのことでした。これらのため、張家界の街中で日本語を話すのは良くないし、ましてや日本人数人が大きな声で日本語を話すなど、言語道断であるとのこと。ISRLE の責任者は、「街中に出たいだろうが、できればホテルの敷地内から出ないで欲しい。もしどうしても出るというなら、せめて日本語は使ってくれるな」とのことでした。彼が最も気にしていたのは、18 日の湖沼視察であり、一般市民の中に日本人が入って行くので、その際に何事も無ければ良いが、とのことでした。以上は、あくまで私が彼から聞いた話です。

以上のことを、「他の日本人参加者 6 名にも伝えてくれ。くれぐれも、注意してくれ。」とのことでした。私は、張家界の状況が北京とあまりに違うので、とても驚きました。

ただし、学会に来ているのは皆研究者あるいは研究関係なので、学会会場のホテル内では日本語を使っても全く問題は無いとのことでした。学会期間中は、そのホテルは ISRLE

で貸切状態なのです。

10月15日：

仕方がないので、午前中にホテルの裏山に登りました。気持ちは良いのですが、一日中霧がかかっており、景色はあまり見えませんでした。参加してくる日本人に今回の案件を説明すると、皆一様に驚きを隠せませんでした。一人の日本人研究者から聞いた話では、張家界の空港では日本人の団体旅行客が来ていたらしいのですが、彼らがこの土地の人々の気分を害することが無いよう、また彼らの身に何も悪いことが起こらぬよう、祈りました。まあ、人の心配をしているどころでもないのかもしれないんですけどね、、、。

この日の夜、学会会場となった万福（ワンフー）ホテルの温泉に入りました。張家界は、韓国では有名な観光地らしく、この温泉にも韓国人旅行客がたくさんくるそうです。実際、18日の湖沼視察の際に立ち寄った観光地では、街中にハングル語表記がいたるところにありました。で、ワンフー温泉の受付に行ったら、いきなり「こんにちは！いらっしゃいませ！」と、日本語で来た？！私はびっくりしました。だって、ホテル内とはいえ、ここは日本語使用があまり良くないと聞いた土地です。でも、受付の女性は、「日本語、少しだけ。ゆっくりしててください」でした。これも、ホッとし、ありがたかった。



10月16日：

シンポ開会日は、あいにくの雨。主催者側では、大変派手な野外ステージを用意し、開催地である張家界・慈利町（市かな？）の町長（市長かな？）さんも来ており、音楽付きの誠に華やかな開会式を予定していました。が、雨が強くなり、急きょ、まずは基調講演を行い、天気が回復したら開会式を行うこととなりました。私は、基調講演の演者の一人であったが、我々の環境省・環境研究総合推進費D-0905アオコ・プロジェクトの発表はかなり高評でした。やれやれ、ありがたい。中国人のみならず、韓国人、ヨーロッパ人からも、多くのお褒めの言葉をいただきました。これもひとえに、本プロジェクトと一緒に進

めてくださった皆様のご努力、アドバイザーの先生方のご指導、P0の先生方のご指導のおかげです。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。



上の写真は、滋賀県大の伴先生の撮影によるものです。

午前11時ごろ、小雨となりました。そこで、皆外に出て、野外ステージに集まって、開会式を行いました。最後に花火と紙ふぶきが舞い、いやー、派手だった。



夕方、パーティーがありました。パーティーでは、何人かの中国人研究者から、「今回、我々の国で起こった数々の暴挙を謝りたい」と、向こうから言ってきました。また、これより少し前、中国の私の親友が、電話で「ごめん、どうしても仕事が終わらず、ISRLEに行けない」と連絡してくれた時も、「今回の中日のいろんな件では、ごめんね」と言いました（この言葉、すごく心に響いた）。いずれのケースでも、私は、「一部の日本人の発言とはいえ、中国のみなさんの気持ちを害することになって、こちらこそ申し訳ない」と言いました。彼らはいずれも、「こんなに厳しい状況で、よくぞ来てくれました！本当に感謝しています！」と伝えてくれました。これらの対応に、本当にホッとしました。我々日中の研究者は、その後、そうした政治的な話をそれ以上は行わず、とにかく歓談・快食・痛飲に専念しました。

10月17日：

今回のISRLEを通じて強く印象付けられたのは、中国の研究レベルの飛躍的向上です。正直、以前の2000年代初頭の中国における陸水学研究は、研究目的すらよくつかめないものが多く見られました。しかし、今回のISRLEでは、日本と同等はおろか、世界の最先端で戦っている中国人研究者が何人もおられることが、実感できました。中国は、経済成長ばかり注目されているかもしれませんが、学術方面でも著しい成長を遂げています。

さて、この日は、シンポ最終日であり、「Bonfire party」という、別のパーティーが開かれました。これは、前日のものに輪をかけて派手であり、中央にキャンプ・ファイヤーのようなものが設けられ、午後の間はたくさんの踊り子たちが練習に専念していました。このパーティーは、食事はあまり出さず（パーティー前に、食堂ですでに食べている）、むしろ歌や踊り、ゲームといった催し物が中心です。大音量の音楽・プロの歌手による歌謡の後、張家界の民族踊り（少数民族が多数住んでいるので）、動く竹竿の間を歩きぬけるゲーム等が催されました。



このパーティーは、田舎町で行われた国際会議ということで、めずらしいせいか、先の町長（市長？）さん、慈利の偉い人たち、プロの歌手・踊り子など、ISRLE参加者以外にも多くの地元の人々が来ており、さらにはテレビ局が録画していました。テレビカメラが、2、3台あったように記憶しています。

さて、終盤近くになって、結婚ゲーム（？）というのが行われました。これは、顔が見えないように被り物をした中国人の女性を男性が口説くというもので、口説きセリフが良ければ女性が被り物を取ってくれと。6人の女性に対して6人の男性だったのですが、これら女性の中には男性が混じっていて、男性を引き当ててしまうといわゆる「はずれ」です。また、口説くセリフにもルールがあり、前の人のセリフや自分のセリフを繰り返してはならない、というものでした。最初、3名の若者の男性（中国人）が選ばれて、ステージに上りました。で、シンポ責任者（もちろん、中国人）が、「ISRLEの参加者を上げるぞ！」となり、なんと、最初に私を「シンイチ、行け！」と無理やりステージに引っ張っていきましました。さて、どうしたことか？！この日中間のややこしいときに、日本人が目立ってし

まい、かつテレビまで来ている、、、。困りました。下手なことは言えないし、何か変なことをしたらどうしようと、必死に考えました。



花嫁を待つ我々です。写真のステージ上、右から三番目が私。この写真は、武漢・水生生物学研究所の沈宏（Hong Shen）さんが撮影してくれました。

司会者の女性が、「日本からのお客さんです！」みたいに言って、おそらく ISRLC メンバーがヤンヤの喝采でした（地元の皆さんは、おそらく複雑な思いであったでしょう）。でも、みんながニコニコ笑顔で楽しんでいるパーティーです。困った顔やしかめっ面は禁物と考え、あくまで笑顔をつくり、その間、考えました。と、私の番が来て、司会者の女性が、「ニイハオマ？（ごきげんいかが？）」と聞いてきました。冷静なら、もちろん「はい、元気です」と応えられるのに、私も「ニイハオマ！」と言ってしまい、その女性は、「ご機嫌いかが？って聞いて、ご機嫌いかが？って答えられちゃったわ！」と言っているようでした。まあ、外国人なので、仕方ないと言ったところか。で、司会者が、「じゃあ、あなた、口説いてよ！」と始まった。そこで、覚えたての中国語で、「あなたはかわいい。あなたは綺麗」と3回繰り返してみました。すると、中国人の司会者の女性が大変に驚いて、おそらく、「この人、中国語で言ったわ！」と聴衆に叫び、聴衆から満場の拍手をいただいた。この拍手の大きかったこと！でも、同じセリフを繰り返したので、ペナルティーとしてお酒を一気飲みしました。でも、ただで終わってはイケナイと思い、「ハオファー！（美味しい!）」と言ったら、またウケた。その後、相手役の女性がオッケーをだしたので、また中国語で「うれしい！」と2回言ったら再び大うけ。

ステージから降りても、他の中国人が大喜びして拍手して迎えてくれました。シンポの責任者も、「よくやってくれた！ありがとう！」と言い、先の町長（市長？）さんはわざわざ私のところまで来て、「一緒に写真を撮りましょう」と言ってくれ、にこやかに一緒に写真を撮りました。いやー、少し勉強した中国語が、大いに役に立った。ですが、実は内心、何とかみなさんの気分を害さずに終わって、正直ホッとしました。あの時のみなさんの笑顔、および次の日の中国人のみなさんの「おお、昨夜のあなたの中国語、よく分か

ったよ！」という言葉を見ると、日中間のややこしい状況を少しでも緩和できたかも、、、
と思ったりもしました。

ちなみに、結婚ゲームで男性の花嫁(?)を引き当ててしまったのは、韓国陸水学会の
次期会長である、Kim, Bomchul 先生でした、、、。彼も、大ウケでした。

日本に戻って、いろいろ考えたのですが、日本に対して複雑な思いがあったとはいえ、
今回の ISRLE をこのように盛大に開催できたのは、もちろん中国人研究者のみなさまのご
努力もさることながら、現地の慈利のみなさんの温かいおもてなしのおかげです。この場
を借りて、厚く御礼申し上げたいと思います。心から、ありがとうございました。

10月18日：

さて、問題の(?)、湖沼視察です。湖沼視察は、張家界の高山湖やオオサンショウウオ
博物館などを視察します(観光地化されています)。さて、最初の高山湖では、山を登って
行く際に、少しトラブルに近いことがありました。この地では、観光客のためにお客を運
ぶ駕籠があります。この駕籠かきの人夫さん達がたむろしている脇を、我々ISRLEメンバ
ーが歩きました。さて、これらの人夫さん達にとって、外人だらけ(欧米からも20名来てい
る。特に私の乗ったバスには、欧米人が多かった)の団体が珍しいのか、「お前ら、どこか
ら来た?」と言ったのかどうか、あろうことか私のネームタグ(ISRLEメンバーは、他の観
光客と区別するために、学会で使ったネームタグを付けている)をグイッと取って、しげ
しげとながめ始めました。まずい、、、。どうしよう。もちろん、「私は日本人です」くら
いは中国語で言えます。が、そんなこと言ったら、どうなるか?困った私が何も言えず、
怪訝な顔つきのその人と見つめ合っていた時、一人の中国人女性研究者が我々の間に割っ
て入って、何事やら中国語をまくしたてて、私を先に行かせました。で、その女性が後で
私に駆け寄ってきて、「シンイチ、危なかったわね。まあ、よりによって貴方を捕まえるな
んて、、、。そうです、あなたはここで日本人と言ってはいけません。あぶないです」とのこと
でした。危機一髪(?)だったのかもしれませんが。

この視察では、私は英語、(片言の)韓国語、(さらに片言の)中国語しか使いませんでした。
今回のISRLEでは、韓国からの参加者が60名もいたので、韓国語は結構使いました。

で、昼ごはんです。大きなレストランに、ISRLE参加者300名が一か所に集められた昼飯。
すごい!その部屋には、300名が一堂に会し、一緒に昼飯です。その部屋には、一般客はお
らず、言語は英語か中国語(と少し韓国語)のみです。私は、自分のバスで一緒のメンバ
ー数名と同じテーブルに座りました。ヨーロッパ人一人、中国人3人、韓国人3人、日本
人は私一人です。さて、昼飯が始まってビールを飲み始めたころ、そのヨーロッパ人(本
人の名誉(?)のため、あえて名前と国は伏せます)がいきなり、「お前ら日本人と中国人
と一緒に仲良くビール飲んでいいのか?アン?なんか小っちゃい島めぐってケンカして
んだろ?ムハハハ!」と、なんとも唐突にヤバいことを言い出しました。私と中国人はあ
っけにとられ、顔を見合わせながら、「いや、そんなに困ったことにはなっていない。我々

は、仲良くしている」と言いました。私がちらと韓国人を見ると、彼らは下を向いて前を向こうとしない。一同からサーッと血の気が引いていくのが、誰の目にも明らかでした。が、彼は追い打ちをかけ、「何言ってんだ！そんな仲良くしているもんか。そうだ、その小っちゃい島、俺っちの国が取ってやる。ムハハハ！中国や日本といったおっきな国の島を、俺っちの小っちゃい国が取ってやる！ムハハハ！」。なんだ、この人は？！再び私と中国人で、「何言ってんだ、日本と中国は一時的にややこしくなっているが、友達だ！そのことに変わりはない！」と言いました。そのヨーロッパ人は、顔は冗談のつもりで言っているのですが、いやー、その話題はちょっと、、、。その時、新たな料理が来て、中国人の一人が料理の説明を始めてくれて、話題が移りました。ふうっ、、、、。

そのヨーロッパ人、他の場所の視察でも、私の顔を見ると、「おう！お前、中国人に島を取られないように用心しろよ！ムハハハ！」と、周りに一般の中国人がいるのもかまわずに言い出します。ありがたいことに、周りに英語を理解する人がおらず、私はちょっと分からないふりをしてその場を離れました。彼の顔つきは、あきらかに冗談で言っているのですが、こちらにとってはシャレにならない。視察先で列をなしているときに、列で待っていても、彼は私を見つけると、「おう！サムライ！○×△●◆▼?!」と言う調子（「サムライ」は、アカンテ）。どうやら日本人参加者が少ない（今回、250 から 300 人中、7 名）中で、比較的話す機会が多かったことから、私に話しかけてきたのでしょう。中国人をかかって、周りにたくさんいるしね。ああ、やれやれ、、、。

どうやら、ヨーロッパの人たちには、日中の今回の問題が「他人事」程度にしか認識されていないのかもしれない。韓国人（教授）ですら、「なあ、シンイチ。俺たちとお前らとでは、そんなに深刻じゃないよな。日本人が韓国に来て、何の問題も起きないぞ。俺たちは、大丈夫だ」と言っています。別の韓国人教授は、「なんで今回の ISRLE には、日本から 7 名しか来ないんだ？！あの島の問題か？俺たちはサイエンティストだ！サイエンスに政治は、関係ないじゃないか！」。そうは言ってもね、、、、。教員だけならまだしも、学生さんの身に何かあったらね、、、、。それに、学会の一日のスケジュールが終わったら、一般生活に戻るでしょ。その時は、サイエンティストが一般人と違う生活するの？

夕食が終わり、バスに戻る途中、お土産屋さん（地元特産品店）があり、立ち寄ってお土産を買いました。で、バスに戻り、そのお店をひょいと見てみると、何と、電光掲示板に「釣魚島を取り返そう。我々の国威を示そう。抗日運動を拡大しよう」と表示されていました。いくら私でも、それくらいは読めて理解できます。少し、悲しくなりました。我々日本人は、この街から歓迎されていない、、、、。お土産屋さんには、我々 ISRLE メンバーばかり居て、中国人と韓国人しかいなかったのも、英語（と片言のハングル）を話す私は韓国人と思われていたのでしょう。実は、張家界では、その掲示板表示がいくつも見当たりました。大きな都市と、小さな都市とでは、状況が異なっているのかもしれない。

でも、気を取り直して、帰りのバス（一時間半）の中では、隣に座った中国人の若い研究者と、ずっと話していました。彼は、学位を取るためか、あるいは中国で学位を取った

ら、海外で研究したいとのこと。私は、欧米を勧めましたが、「ちなみに、日本はどう？」と聞いたら、「ペーパーテストがあるって聞いたが、本当か？」というので、「いや、、、そんなことは無いと思うが、、、」というので、「なら、日本でも良い。あなたのラボは、私を引き受けてくれますか？」というので、「私の専門は微生物だ。それでも良いか？君の専門はベントスだろう？」と聞くと、「そうですね、、、うん、もっと考えます」とのことでした。彼は、私と話をすることを、大変楽しそうでした。

視察が終わってホテルに戻ると、もう午後10時過ぎ。例のヨーロッパ人と同じバスなので、最後にお別れの挨拶のときに、やっぱり昼飯の時のテーブルメンバーが顔を合わせました。そこでもやはり、例のヨーロッパ人があの話を冗談交じりに持ち出しましたが、私も中国人も、「もういいって！仲良くしてるんだから！」というので、「そうか？でも、おまえらがうかうかしていると、俺っちの国がああんな島をとっちゃうぞ！ムハムハ！」、冗談のつもりでしょうけど、、、。吉本なみにしつこい。

10月19日：

朝ご飯のとき、他の席が無く、またほぼ同じメンバーの席に座った(?!)。やっぱり彼が、例の話を持ち出し、「シンイチ、お前の食っている牛肉麺、チャイニーズ・ボムが入っているぜ！気を付けな！」って言うので、「ハハハ、そりゃ美味しいね！俺はチャイニーズ・ボムは大好きだ。たとえ本当に入っている、食ってやる！」と言いつつ、彼は大笑い。隣の中国人が「そうさ、シンイチの麺には、ホット・チリ・ボムが入っているんだ。一応、食えるぜ」って言いました。たしかに、こちら張家界の料理は辛く、牛肉麺（ニューローメン）も辛かった。彼は、「シンイチ、お前って本当にチャイニーズを信頼しているんだな、、、」と言いつつ、私は「そうさ、俺はチャイナが好きだ。チャイニーズも信頼しているぜ。」と返し、「そうか、それなら、この話題はこれで止めにしよう」と彼が言って、ようやく、この話はキリがつかしました。みなさん、彼が納得したと思います？違うのです、単に、朝飯後、荷物のパッキングがあり、これで帰国するので、続きはまたね！ってことなのです。ああ、もうっ！次は、ひょっとしたら、ブタペストか、、、。それまで（来年8月）には、日中が元の状態に戻っているでしょう。

で、南京へ移動しました。私を南京へ連れて行ってくれたのは、NIGLAS（南京地理陸水学研究所）の劉教授です。張家界の空港では、劉教授以外に、滋賀県大の伴教授とドクター3年の馬場さん（今回のISRLEで優秀ポスター賞を受賞！おめでとう！）も一緒でした。



だが、この空港でも日本人らしき他に見なかった。また、我々も日本語を使うときは、小声にしました。やはり、気になります。空港に来る間にも、例の電光掲示板をいくつか見たからです。

で、ISRLE 参加者以外の日本人を私が見ることは無いまま、夜 8 時過ぎに南京到着。南京へは、劉教授と一緒に来ました。彼が言うには、南京では、反日運動は一切起こっていないそうです。また、戦後、日本人観光客がむしろ増加しているので、日本人に対する理解は進んでいるとのこと。私が、ためしに街を一人で歩いても大丈夫かと聞いたら、「全然大丈夫。夜も大丈夫だよ。そこの大通りを少し先に行くと、湖があって、きれいだから、夜も問題ないから一人で行ってごらん」って言われました。で、、、試してみました。何か怖くなったら、すぐにホテルに戻るつもりでした。湖はちょっと距離があるのは知っていた（2009 年にも同地に来た）ので、その方面へは行かず、ホテルから NIGLAS まで歩きました。歩く途中（夜中の 9 時半ごろか）、多分 30 軒ほどのお店の電光掲示板を見たのですが、南京のお店では張家界のような「反日・抗日」に関する表示は一切ありませんでした。ちょっと安心して、コンビニで「低糖」のお茶を 2 本買い、ホテルに戻りました。

南京に限らず、私がこれまで中国の街角で見た光景ですが、みなさん本当に楽しそうにしています。当然、酔っ払いはいるわ、道路でキスしているカップルはいるわ、客引き(?) はいるわ、日本と変わりません。

ところで、ホテルのエレベーターに乗ったとき、同乗していた宿泊客の男性（少し酔っていた）が突然、「Are you Japanese?」と聞いてきました。これは、驚いた。さて、どう答えるか？私は咄嗟に「No」と言いました。その中国人は、中国語で何やら言いましたが、すぐに私の階に到着。実は、そこが彼らの階でもありましたが、私が「ラオジア（ちょっとすいません、おそれいます）」と言って彼らの間を抜けようとする、彼らは笑顔で通してくれました。ああ、ホッとした。あとで、劉教授にこのエピソードを話したら、「ハハハ！大丈夫だって！なんで「俺は日本人だ！」って言わなかったの？何もないよ」と言い

ました。が、その宿泊客がどんな人かもわからないし、第一その人に私が何者か話す必要も無いので、でもかといってケンカするわけには行かないので、まあ、あれで良かったの
でしょう。

10月20日：

朝9時過ぎに NIGLAS 到着。一人の中国人教授と話をしたのですが、彼は、「中国各地で
今回の島の件で暴動が起こっているが、あれを起こしているのは教育を十分に受けていな
い人たちばかりなんだ。彼らは、とにかく給料が低くて、生活はギリギリで、それにす
ごい不満をもっている。だから、例の件にかこつけて、暴動起こしているのさ。だから、
これは日本との国際問題みたいに見えるが、暴動については、実は国内問題なんだ」と言
っていました。ああ、日本のニュースで解説されていたのと同じ内容です。日本帰国後、
同様の報道・解説は、10月24日の朝日新聞の朝刊にもありました。

午前9時半ごろから講演開始。質疑応答で一時間半ほど講演しました。再び、好評で
した。とくに、アメリカ帰りの女性研究者が講演後にも質疑応答、その後しばらくして午
後にも1時間ほど、私の講演内容を含めた様々な研究のディスカッションを彼女としまし
た。研究にとっても熱心な方でした。彼女に限らず、ISRLEの間にも、武漢の研究所の若い女
性研究者が良い仕事の発表をしており、この方も自分の研究内容について私にコメントを
求めてきました。これら二人とも、とにかく研究に対する情熱はかなりのものであり、私
は強く印象付けられました。中国恐るべし、中国の女性はすごい！と思いました。

ところで、この NIGLAS の女性研究者は、ISRLE での私の結婚ゲームを見ていたらしく、
「シンイチのあの対応は、張家界の人に好評だったと思いますよ。あれで張家界の人は、
シンイチを大好きになったと思う」と言っていました。どうやら、、、やはりあのパーティ
ーには、研究者以外の一般の方々も来ていたのです。だって、市長も来ていたのだから。
ああ、何とかなつたと、あらためてホッとしました。

午前中の NIGLAS 講演の後、豪華な昼食を取って、日本留学希望の南京大学学生と、南京
大学の視察を行いました。ここで、彼の指導教授である田教授をご紹介いただき、30分ほ
ど話しました。田教授は、日本に7年間生活され、京大で学位を取られました。生態研に
も来たことがあり、昨年11月には生態研の大園准教授を招聘したそうです。日本との関係
の大変深い方で、素晴らしい日本語を話しておられました。

さて、日本留学希望の南京大学学生と南京市街を歩いているとき、南京に来て初めて例
の釣魚島関連の電光掲示板を見ました。テイクアウトの鶏のから揚げ屋さん(?)のよう
です。これは、この学生にとっても珍しいらしく、「あれ？南京にもありましたか?!」と
言いました。彼も、大変すばらしい日本語を話します。で、電工掲示板をよく見ると、、、
私が理解できない文章がある。短いのに。彼に翻訳してもらおうと、「釣魚島は中国のものだ。
でも、うちのチキンは家族全員のものだ！」だそうです。うーん、、、これは、、、ひょっと

して、、、釣魚島にひっかけてた冗談かも。その学生も、「鶏の宣伝というか、、、、ですね、、、」とコメント少なく。私には冗談に読めてしまいました。南京大学内、南京市街で、その学生とは日本語で話しました。というか、彼が何の心配もせずに、日本語で話していたのです。もちろん、大声ではないですけどね。

この日、何人かの中国人研究者と、一室で研究のディスカッションをしていたら、彼らの一人が、突然声をひそめて、「でき、例のあの島の件だけど、日本人はどう思っているの？本当に、ニュースで言っているようなの？」と聞いてきました。おそらく、これを日本人に代えてみると、「例のあの島の件については、中国人はどう思っているの？本当に、ニュースで言っているようなの？」でしょう。やはり、一般の中国国民は、日本国民と同じ気持ちでニュースを見守っていたのでしょ。少なくとも北京と南京の市民は、日本国民と同じ気持ちのようです。が、歴史的背景やその後の社会の動静から、中国全土が北京や南京と同じ状況ではない、ということでしょうか。現在、過去長い年代にさかのぼった事実に基づいて、世界各地でさまざまな紛争が起こっており、これは今後も続きます。歴史を知ることは、大変重要です。

10月21日：

朝の8時にフロント集合、太湖のある無錫市へ移動しました。まずは、劉教授が中心となっている湖沼水質改善の実地試験地。彼らは、●●湖（あー、名前忘れた！）の一部の湾を閉鎖し、その湾の水位を人為的に下げて、水中深くまで光の透過を上げて、水草の成長を促進しました。その結果、水草がグングン伸びて、逆にそれまで優占的であった植物プランクトンの現存量が低下し、透明度が上がり、私が見たときは湖底が見えていました。一方、この処理を行っていないメイン湖盆の方は、相変わらず植物プランクトンで緑濁し、透明度30センチかな、、、。

その後、太湖のフィールド・ステーションに移動しました。と、いきなりすごいアオコがお出迎え！



ここは、GLEONにもメンバー入りしており、長期湖沼モニタリングでは世界でトップにな

るかもしれないほどの充実した施設で、現在、世界中の研究者がこの施設に注目しています。今度、もっとゆっくりと時間を取って見学したいなあ、……。って、実は、見学は2回目です。が、一回目（2009年）の際には、見学人数が多かったのと、私の意識がそこにあまり無かったこともあり、もう一度見たい!気分です。



さて、上海・プードン空港に移動。途中で、昼食。太湖のエビと魚をいただきました。ああ、湖の幸! 魚は、生け簀から取り出して、料理してくれました。



その後、何もトラブル無く、無事に上海到着。空港では、ようやく数十人の日本人がいました。中には、私が少し驚くくらい大きな声で日本語で話しているグループもあり、張家界での少し辛い気分から考えて、「マジか?!」でした。

日本に戻り、南草津駅に到着。すでに日は回っており10月22日の午前零時過ぎ。タクシーに乗ったら、「お客さん、大きな荷物で、海外旅行ですか? え? 中国? ああ、...」。それからは、この方の中国に対する不信と、でも何とか日中の話し合いで解決できないかと言う気持ち、「どっちが先か?」の議論の不毛さが入り混じった、この方の複雑な気持ちを吐露してくださいました。彼とは、議論をしたわけではありません。あくまで彼は、「お客さんが中国で仕事をしているので、どうなのかを聞いてみたい」ということでした。でも、彼と私とは、決して意見は一致しなかった。おそらく彼は、もし中国の方がお客さんで乗ってこられたら、きちんとお仕事をされると思います。が、心の中では、さまざまな思いがめぐるに違いありません。そして、これは恐らく、日本人・中国人に一般的なことであろうかと思います。お互いにお互いを必要としているのは分かる。でもね、...と、少し心に引っ掛かりがあるのです。

以上が、私の今回の中国紀行です。また、私の理解での、日本人と中国人の心の中です。そりゃ、全てのケースにこれが適用可能だとは思いませんが、世の中にはいろんな人がおられることを考えると、少なくとも我々日本人が中国に行って現地でお世話になる（つまり、ホテルに滞在したり、レストランで食事をする）場合、現地の方々に不必要な不快感を与えないようにした方が良くかもしれないと、私は思います。ですので、私は相手が日本語で対応しているときのみ（例えば、南京の学生さんとの会話や、田教授との会話）、日本語を使いました。

ここで改めて、勘違いしていただきたくないのは、中国で日本語を使うことを私がお勧めしない理由は、自分の身を守るためではありません（そりゃ、結果的にそうなるかもしれませんがね）。それより、むしろ中国の方々に不必要な不快感を持ってもらわないためです。ですから、中国は、（あまりに変なことをしない限り、またたまたま激しい人に出会わない限り）、安全な国です。自分の身を守るというより、相手に不必要な不快感を与えないために、中国国内で日本語で大声で話をするのを私はあまりお勧めしないのです。私が考える、現在の日中関係にとって重要なことは、お互いの交流を絶やさないこと、お互いが理解しあう気持ちを持ち続けそれをできれば実践し続けること、です。

これから中国に行く方にとって、私の経験が少しでもお役にたてる、あるいは心の準備ができることを祈ります。

最後になりましたが、今回の私の中国紀行で、各地でさまざまにお世話下さった中国のみなさま、誠にありがとうございました。深く御礼申し上げますと共に、今後の日中両国の友好と深いお付き合いを願って止みません。